

草庵仏教

第125号
(発行日)
2000年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX (0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座(浜屋西宮店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会(念佛寺)
第3土曜日午後3時

死の不安について

(以下、死の不安の問題に對して、お念仏はどう応えるのかについて、対話編にして考えてみました)

G 「私は、ふと死ぬんじゃないかという不安が時々起こります」
D 「死ぬかもしれないという不安に襲われるんですね。それは苦しいでしょうね」
G 「ええ、苦しいです。不安が起こっている最中は本当に苦しいです」
D 「大変ですね」

G 「私はこの死の不安を人生の大事な問題として受け取っています。そしてこの問題を乗り越えたいと思っています」
D 「この問題を人生全体の課題として、それを乗り越えることによつて人生の真実に迫りたいと思われているんですね」

G 「ええ、そうです。これを人生の公案として、人生の真実にであいたいのです」
D 「普通は死の不安が心の底にあつても日常生活ではそう不安になりませんね」
G 「ええ死の不安は深層意識にあつても、普通は意識の表面にはそんなに現れないと思ひます。けれども私の場合はしばしば現れるのです。ですからいやが応でも死の問題とせざるを得ないので」
D 「それで、どうしても死と真向きにならざるを得ない。」

だから、死の問題を積極的に自分の大事な課題として取りくんでいこうとしておられるのですね」
G 「ええその通りです」

D 「よく分かりました。予期不安というのは、自分の心の影が自分を苦しめているのでしようね」
G 「ええそうなんです。私のこの不安を作り出しているのは外部のものではなくて、自分の心で自分を苦しめているのです。そうと頭ではよく分かっているのですが、不安が起こってくるとうとうにも苦しくなるのです」

D 「死の恐怖が起こる時にはどうしていますか」
G 「以前、あなたからお念仏を申す事を教えられ、不安な時には念仏しています。けど、念仏しても苦しみは続きます。どうしたものでしょうか」

D 「苦しいときにお念仏をするけど、念仏申しても苦しみは取れない、と言われるのですね。私が思いますのに、Gさんは苦しみを取るために、念仏を称えておられるように思います」
G 「ええ、苦しいから、苦しみを取ろうとして念仏しています」
D 「私がお念仏をお勧めしましたのは、むしろ苦しみがどうしたお念仏申すことをお勧めだからお念仏申すことをお勧め

めするのです」
G 「苦しみを取るために念仏するのではなくて、取れないから念仏するのですか」
D 「ええ、不安が起こつて、それが取れないから南無阿彌陀仏なのです」

D 「自分の不安な心がどうにも始末がつかないから、自分の心にお手上げする。それがナムアマミダブツのお念仏となるのです」
G 「お手上げのナンマンダブツなのですね」
D 「ええ、阿彌陀様は、汝の心がどうにもならねば、そのまま我が名を称えてきたれ」と申されております。あなたも不安があつたの始末におえなくて、お手上げとなつてナムアマミダブツと申すのです」

G 「そういう場合にお念仏する事はどうなることですか」
D 「お手上げになつて念仏しているままが、阿彌陀様に任せられていることになつていくのです。苦しみが起つたとき、ナンマンダブツと申す、それがそのままあなたのお心を阿彌陀様にお任せするのです」

G 「でも念仏しても楽になりません」
D 「それは次の苦しみが起こつてくる苦しみのみは今の念仏に任せます。それで終わらせているのです」

それでも苦しみが出てくるのは次の苦しみが起こつてきたのです。次の苦しみは次の念仏で終わりです。完結して

G 「一度の苦しみに一度の念仏ですか」
D 「ええそうです。人間は一瞬一瞬に生きていますから。それに阿彌陀様に自分の心の始末をお任せしたということは、苦しくなるも楽になるも、どちらもお任せであつて、お任せしたのに楽にならないではないかというのはお任せしているのではありません」
G 「なるほど、心の始末をお任せしたという事は、私の方から注文つける権利を放棄していることなのですね」
D 「ええそうです。たとえば、資金の運用を信託会社に一切任せたとします。けれども損失になつたとします。その時、あなたに会社に任せたとしたの

〈念佛寺報恩講ご案内〉

12月22日 (金)

午後2時始まり

〈講師〉

了信寺住職 高間重光先生

* ご自由にお参りください。

と文句を言うのは、資金の運用を一切任せたことになっていないのです」

G 「なるほど、念仏したのにまだ苦しいと、念仏したのにお任せしたことになるなら、苦しいも楽になるも、心の有様にも手をかけず、心はどうあるうとも、そのままナムアミダ仏とお念仏申すばかりなのですね」

D 「ええそうです。《どうにもならねば我が名を称えよ》の仏の仰せのまま、心はどうあるうともただ念仏してゆくのみです」

G 「では称えるばかりでいいのですか」

D 「称えるばかりですが、称えつつ《我が名を称えよ》と仰せ下さる阿彌陀仏の大悲のお心をよく聞くことが大事ですね。あなたの場合は特に死の問題が大きいですから、阿彌陀仏が《我が浄土に生まれることが出来るとおもって念仏申せ、必ず生まれさせる》と仰せられる大悲の約束をよくよく聞くことです」

G 「そうですか。けど、どうも私は仏の仰せを疑ってしまいます」

D 「凡夫は仏の言葉を疑うのです。凡夫の分別的知性で分る範囲のものではありません。凡夫は分別的知性で受け取ろうとしますからどうしても疑うのです」

G 「仏の仰せを疑う心はどうしたら取り除くことができませんか」

D 「われわれ凡夫の力では疑い心は取れません。疑いは凡夫の心の本性です」

G 「では阿彌陀仏のお言葉を信じることは永遠に出来ないのですか」

D 「いいえ、お念仏を申しつつ、《我が名を称えよ》とまで仰せ下さる無窮の大悲のお心を聞いていくところに、仏心大悲が私の心に届いてくださいます。その仏心大悲が信心となつて仏の本願の仰せを信じていくことができるのです」

G 「仏心が私の心に届いてくださつて、本願を信じていくことができるのですか」

D 「ええ、そうです。だからよくよく仏の本願の大悲を聞くことが大事です。顔を下にに向けては天上のお月さんのお光は届きません。天上のお月さんに顔を向けることです。顔を月に向けてと月の光が私の顔（心）に届きます。よくよく本願の月に心を寄せることです」

G 「疑いは凡夫の本性で、一生疑い心が取れないのなら、阿彌陀の本願を信じられないのではありませんか」

D 「凡夫の疑い心にさえ妨げられないのが仏のお心です。それゆえ無碍光と申されます。無碍光の無碍が届くと、私の疑い心がどれほどあつても、あつたままそれが全く役に立たないとは知られ、私の疑いの骨抜きがなされます。疑いがあつてもそれが力をふるわなくなり、私の疑いの思いを大事にするから己の疑い心が振り回されるのです。疑いは全く相手にしなくなつて、た

だほればれと阿彌陀の本願一つをたのみにするのです」

G 「ああそうですか、私は疑う心があつたら駄目で、どうかしてこの疑いを無くさねばならぬと思つていました」

D 「凡夫ですから一生仏のお言葉を疑う心は無くならず、おんが、しかし疑い心は仏様からいただいた信心を壊したり妨害したりすることはできません。そういう意味で信心は凡夫の疑い心を照し破つてくださるのです」

G 「じゃあ初めの質問に戻りまして、死の不安が起つたときは、そのつどお念仏に転換して、念仏を申していくのですか。苦しみがあればあつたまま、楽になれば念仏していきま、ただそのまゝ念仏していきくのみですか」

D 「ええそうです。苦しみを無理に念仏で取ろうとするのではなく、苦しみが取れるか取れないか、それは阿彌陀様のお仕事にお任せして、苦しみが起るそのまゝナムアミダブツ・ナムアミダブツと、行じてゆくのみです」

G 「そのことの連続なのですか」

D 「ええ、そういう念仏生活の中で、念仏のいわれ《我が浄土に生まれたい》が出来るとおもつて念仏申せ」という



宗十郎頭巾 (C)SHOGAKUKAN INC.

阿彌陀仏の大悲の誓いを聞きつけていくのです。それが時至つて、本願を受する信心が届いてくださいます。そこに、あなたの死の問題に《開け》が与えられると思ひます。すなわち死を超えていく道、いわば浄土往生の人生が開かれてくるのでしよう」

G 「そうなるかと死の不安は無くなるのでしょうか」

D 「生にたいする愛執が深い私たちが死すから、死の不安が全くなくなることはとても思ひません。しかし現在のあなたのような死の不安は克服され、随分やわらぐと思ひます。それをあなたが実践してみればいかがですか。信心によつて死の意味が変わりますから、死の不安はなくなり、喜び、浄土に生まれてゆく喜びも起りましょう」

G 「そうですか。ともかく、死の不安を縁として、死を超えていくような真実にであうのですか」

D 「ええおつしやる通りです。思いもかけない広大な大悲のまことにあうのです。ですから死の問題は返つて人生の扉を開く大事な縁になつてくださると思ひます」

G 「お話を聞きまして、お念仏の大事さを改めて知らされました。けれども、苦しいときはお念仏が申せても、平生はなかなかお念仏が申されません」

G 「念仏申さねばお助けに出来ないことはありませんが、阿彌陀仏の本願に《乃至十念

せよ》とお念仏を申すことを阿彌陀様ご自身が願つておられますし、親鸞聖人も念仏に『万行円備の嘉号は障りを消し疑いを除く。専らこれを修すべし。濁世の目足、必ずこれを勤むべし』

《現代語訳……涅槃の安らぎに至るあらゆる浄らかな修行がすべて備わつてゐる南無阿彌陀仏の名号は、さまざまに私たちが苦しみを消してくださる。本願への疑いを除いてくださる。釈迦・諸仏が教えて与えてくださったお念仏を、末法の時代に生きてゐる私たちは専ら実行すべきである。濁悪の世の中に生きてゐる私たちに人生の意味と方向を知る智慧の眼とその方向へ歩かせてくださる力となる、そういう功德の備わつてゐる念仏を必ず勤め行ふべきである》とお勧めになつておられます。ですから念仏・高僧方のお勧めに従つてお念仏を申させていただきますことです」

(了)



蘇合香 (C)SHOGAKUKAN INC.

真宗聖典講座

念仏は行者のために、非行非善なり。わがはからいにて行ずるにあらざれば、非行という。わがはからいにてつくる善にもあらざれば、非善という。ひとえに他力にして、自力をはなれたるゆえに、行者のためには非行非善なりと云々。

〈歎異鈔第八章第一講〉

（現代語訳……）念仏は、名号を称えている私どものがわからいえば、行でもなく、善でもありません。南無阿弥陀仏と称えて往生の行にしようとして、自分ではからい決めて行っているような行ではないから、（行ではない）というのです。また、名号を称えて善根功徳を積みかさねていこうとはからって行っているわけではありませんから、（善ではない）というのです。念仏は、阿弥陀仏から回向された全くの他力の行であって、自力をはなれた行であるから、私どものがわからいえば、善でもなく行でもないのであると仰せられました。

称える念仏をどう了解すればいいかについての、親鸞聖人の思し召しの大事な点をここで述べておられます。

まず、ここで行と言うのは、おこないという意味ですが、単なる行いではなくて、涅槃のさとりに至る行い（チャリア）という意味です。ここで「念仏は非行」というのは、真宗における念仏の行為は、悟りを開くために為す私の修行ではないということです。浄土真宗以外では、総じて行といえど私が悟りを開くために私の為す仏道修行のことです。たとえば戒律を保つとか、禪定を行うとか、經典を誦読するとか、布施を行うとかいうように、自らに課して自らの力で行う修行の事です。

ところが本願の名号を称えるのは、私が悟りを開くために私の側から為す修行ではないのです。それで、非行なのです。

真宗のお念仏は非行で、おのずと「非善」なのです。すなわち私の側から行う善行ではないのです。非行は行為の面から言い、善は行われる内容から言われたものです。

行とは「行ずる」ことで、何を行ずるかと言えは善を行ずるのですから、非行はおのずから非善でありましょう。そこで真宗の念仏は、私が自らの行いによつて為すところの善ではない、いわば自分に励んで積み上げる善根ではないのです。布施の善を行ったり、修行者を供養したり、寺に寄進したりする、そういうさまざまの善根功徳がありますが、お念仏を申すということは私が功徳を積もうとしておさめる善根ではありません。

ここで「わがはからいにて」行をおこなうのでもなく、善をおこなうのでもないといわれています。はからうとは、私たちが修行したり善根を積んだりする場合、「これだけのことをすればこれだけの結果を得ることが出来る」という計算のもとで行うのが凡夫の常です。普通、凡夫は効果や功徳を期待して善を行って修行もします。私たちが悟りを得たいと思つて修行をするのは、悟りという結果を得たいと私が計らうて行う修行でありましょう。

これは仏道だけではありません。総じて私たちの行いの大半は、「結果を予想し、期待し、何かを得ようとして」行為します。たとえば、会社で働くのは収入を得ようとして働きます。鉢に花の種を植えるのは、開花を期待しているからです。ゴルフを練習するのはゴルフが上達するのを予想し期待するからです。

このように私が「何か結果を得ようとする」という心を「わがはからい」といいます。要するに本願念仏は、これから何らかの目的を實現するための手段として私がおこなう行でも善でもないのです。浄土往生をもくろんで私が行うような念仏（自力の念仏）ではないのです。

念仏することによつて楽になるうとか、安心しようとか、信心を得ようとか、はつきりさせようとか、靈験を得ようとか、幸運を得ようとか、時には病気を治そうとか、安全を祈るとか、そういうように功徳を「得ようとはからう」念仏は総じて自力の念仏といえましよう。

「得ようとはからう心」は凡夫の生涯を通じて離れられないものです。ですからたとえ他力の念仏すなわち「名を聞く念仏」に助けられる身になっても、何かにつけて「功徳を得よう」というはからい心は残り続けていくものです。それほど自我のはからいは強いのが凡夫です。

ただ、たとえ計らう心で称える念仏になつても、お念仏の上に弥陀の仰せを感じる時、はからいが廃つて、お助けの確かさが反復されてまいります。ですから一生はからう心は無くなりませんが、弥陀の誓願ははからいをそのつど破つて私の上に現れてくださいます。

今、親鸞聖人がお示しになる念仏は、これから何かを獲得しようとする念仏ではなくて、「助けるぞため」に「我にまかせよ」との弥陀のお助けを告げてもう弥陀の恵みそのものです。今の救いそのものを賜う念仏です。弥陀の仰せを聞くばかりで、弥陀の大悲に満たされるのであります。

人間は「病気になるたら困る」「食えないようになつては困る」「収入を増やしたい」「才能をのばしたい」など、様々な願望や期待をもつて、その願いをかなえようと配慮し、計画し、行動しています。そういう生活を自我のはからいの生活といえます。一生このはからいをしながら生きていくのです。けれどもはからいの生活は、自分のはからい通りにならない時には欲求不満が起りますし、また自分の思わく通りになつたとしてもその幸せを失わないうようにという不安や思い煩いをまぬがれません。それに、自分の願望を遂げようとするとき、それを妨げる（邪魔な人）がでてくるものですが、そういう人に対する憎悪感に悩まされてしまいます。はからいの生活にはこのような悩みや苦しみがついてまわります。

それは、いつでも今この私に「このままなりで有難い」という大悲の真実にあわなにかぎり、のり越えることは出来ないものです。（了）

禿頭誠師の言葉

「そのままと

聞きたびごとに涙かな」
そのままとの一言に五劫光載永劫のご苦勞も、千須彌山の骨身も皆おさまる。永い永いご思案で、短い短い一念を案じて出してくだされたのなり。さればこの一念は五劫光載永劫の涙のかたまりなり。
駒月の某曰く、「皆がそのままそのままと云えど、涙の出ぬそのままでは残り多い」

これは禿頭誠師の「求法用心集」に記されている師のお言葉である。禿頭師は滋賀県堅田の大谷派源通寺におられたお方で、大正十二年に七十八才で往生された。専心に念仏聞法の生涯を送られた希有名師であった。この「求法用心集」には師の尊い法語が宝のようにちりばめられている。

阿弥陀仏の本願はよく「ソノママなりのお助け」と言われる。そうに違いない。しかし、私はこの言葉を実に軽く聞いている。「ソノママ」は本当は驚くべき恵みの言葉であるのに、驚きが乏しい。
「求法用心集」には次の歌も載せられている。
「落ちかかる 身をばそのまま すくうぞと ひまなく響く 弥陀の喚び声」
「落ちかかる身」であるとは、なかなか実感できない。しかし、私のコノママでは助からぬ身であり、助からないのが私のコノママであることは身にしみている。私のコノママは闇と憂苦である。しかし、今が地獄へ「落ちかかっている身」とはなかなか実感できていないゆえ、阿弥陀仏の「そのままなりを助ける」が、(聞きたびごとに)涙がでるほど響かないのである。今が地獄へ落ちかかっている身とは感じられない鈍感な私がいる。

地獄をもう少し実感的に引き寄せて味わってみたい。地獄とは暗黒処といわれる闇であり、また極苦処といわれる苦悩の境界である。
現在に地獄を感じる心が薄いとしてみても、私たちは生まれる前も不可解、死んで後も不透明、否現在も分

からないものだらけの中に包まれていないか。清沢満之師が(四顧茫々の雲霧に囲まれている)といわれる通りである。我が人生のみならず、世界がこの有様である。不透明、不可解、虚無の闇の中に置かれている。そして、人生全体が憂苦であり不安である。しかも煩惱の火が、内面も社会も極めて盛んに燃えている。
こうした闇と苦と煩惱の無窮なる状況を一言で地獄的と言いついてみたい。
私は四顧茫々たる無窮の闇にすべり込まんとしている身ではなかるうか。それが「落ちかかる身」といただける。

今、落ちかかる私に、今のお助けが、今の念仏である。「そのままなりで助ける」と喚びかけたもう。落ちかかる私の今ままで「必ず助ける」と喚びかけたまうには、弥陀は私の愚悪のままを既に引き受けて、私を仏にする兆載永劫の御修行を仕上げた下さったからである。すなわち私を救う元手をすでに備えてくださったのである。その上から「そのままなりで引き受ける」と仰せくださるのである。

阿弥陀仏が我らのために為したもうご修行の物語は大無量寿経に説かれている。
法蔵菩薩のご修行において、法蔵菩薩が修行のため捨てられた骨身は、ヒマラヤの山(須彌山)が千になるほどであると言われる。地獄に墮ちるような者を一人一人仏に為すための修行であるから、それは兆載永劫の修行といわれるほどの永き時間をかけてのものであろう。
このように説かれねばならないほどの阿弥陀仏のご苦勞がかけられている私である。

さらに驚くべき事がある。
「そのまま助ける」の仰せを「そのまま聞くばかり」すなわち聞く一念で、仏になる功德を頂けるようにまでになしてくださったのである。私の「コノママ」では闇の底に沈んでいく「コノママ」である。落ちていく「コノママ」である。
このような我が身が「そのままなりを助ける」という弥陀の仰せを聞く一念で助かるようにまで仕上げられているのである。聖道門ならば永き世かけて修行せねば仏になれないのに、大慈悲の仰せを「私のためであった」と聞く一念(一瞬)に仏になる全功德を弥陀より賜るのである。

仰せをただ聞く一念という短さの窮まりで仏になる種は全て与えられる。すなわち聞信の一念に仏因を賜るのである。そのようにまで仕上げてくださいた永い永いご思案であったのである。

貞信尼の歌にも
「そのままと 聞きたびごとに 涙かな かぎりなき身を 捨てし喚び声」
というのがある。

仏の「そのまま」のみ言葉に、阿弥陀(無限)というかぎりない仏の身を私のために捨ててくださいたご苦勞がこもっている。まことに聞きたびごとに涙してしかるべきお言葉である。それにもかかわらず、私は軽く軽く聞いている。本当に申しわけないことである。(了)

【住職つれづれ日誌】

*十月三日。八組の寺院関係者の研修旅行に参加。坊守は行けず、私だけ参加。総勢十二人ほど。滋賀県湖北の教如上人ゆかりの五村別院などを参拝。後、長浜市の街を散策。五村別院は本堂もさることながら、他の建物の内部が随分広い。ただそれがどれだけ生かされているかは別問題である。建物やタタミはかなり古くなっていて維持が大変であることは一見するだけで伺える。真宗にかぎらず、今日の仏教寺院はその伽藍の大きさに似合うだけの活動が十分なされておらず、建物の維持管理に財的エネルギーがかなり消費されているのではなかるうか。八組のこの種の研修旅行もマンネリ化してきたことを感じながら帰りのバスに揺られて午後六時半にJR尼崎に到着。
*十月十九日。八組門徒会員研修。人間の基本的な苦悩と阿弥陀仏の徳との問題に触れる。最後に門徒会員さんから「あなたの話と日常生活とどういう関係がありますか」とのご批判をいただいた。仏法は日常生活に役に立つものでなくてはならないというのが、今日の常識なのであろう。私は、基本的に破綻している日常生活自体の救いを問題にしたのだが。しかし、この質問を私の中で大事にしていきたい。